大月市埋蔵文化財調査報告　No. 3

近久保経塚

市営団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

大月市教育委員会

大月市猿橋町藤崎

近久保経塚

TI KA　KU　BO　KYOU　ZU KA

1990

大月市教育委員会

序

大月市は山梨県の東部に位置し、280.30㎢の広大な面積を有しています。しかし、平坦地は極めて少なく、山林原野が8割以上を占めているため、非常に起伏に富んだ地形となっています。

このような地形のためか、本市内の埋蔵文化財の分布状況についてみてみますと、全般的に小規模ではありますが、非常に数が多いという特徴があるように思われます。本市では現在までに119箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されていますが、その中のほとんどが縄文時代の遺跡であることも、本市の埋蔵文化財分布の特徴であるといえます。

「埋蔵文化財」というのは、土地に埋蔵されている文化財のことですが、これはまぎれもなく私達の郷土である大月の地に生きた祖先が残した生活の痕跡なのです。現代に生きる私達には、祖先が残した文化財を保護し、未来の大月市民に引き継ぐ責任があるのです。それは、私達には過去や未来の人々に無断で、貴重な文化財を壊してしまう権利はないと考えられるためです。

しかし一方では、開発事業は現在の私達がよりよい社会を築いてゆくうえで必要な手段です。このことは一見、両者が並び立つことが不可能であるように思え、開発と保護とどちらが大事かという二者択一の問題になってしまいがちですが、両者ともに成立つ方法を真剣に考えなければならないのです。

開発によって貴重な埋蔵文化財が失われてゆくなかで、適切な方法で発掘調査を実施し、その規模や性格、残されている状態、場所等を正確に記録し、それを報告書として刊行することは、私達の祖先そして子孫に対する、最低限の義務であり責任であるといえましょう。

このたびの発掘調査は、「市営住宅藤崎団地建設事業」の造成工事に際して、大月市土地開発公社から、猿橋町藤崎に所在する、近久保経塚の調査を委託されたものであります。このような近世の遺跡は市内では数少ないというだけでなく、山梨県内でもこの種の塚の学術的な調査例は希少であると聞いており、近世における信仰の一形態を探る上で貴重な資料を得たものと、喜ばしく思っております。

今回の発掘調査を実施するにあたり、御協力を賜りました関係諸機関各位、並びに残寒の中、現場で直接調査に当たられた作業員の方々に、厚く御礼を申し上げます。

平成2年5月

大月市教育委員会

教育長　矢頭達哉

例　言

1. 本書は、大月市猿橋町藤崎字近久保に所在する近久保経塚の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大月市が計画した「市営住宅藤崎団地建設事業」の造成工事に伴うもので、大月市教育委員会が大月市土地開発公社の委託を受けて実施したものである。
3. 調査は、平成元年２月13日から平成元年３月30日まで実施した。
4. 調査の主体は大月市教育委員会であり、当時の役職は次のとおりであった。

教育長	矢頭達哉
教育次長	小泉伸好
社会教育課長	天野　武
社会教育課長補佐	阪本太郎

5. 発掘調査参加者は次のとおりであった。

調査主任	（社会教育係）	杉本正文		
作業員	（大正大学）	小林一弘		
	（市立大月短期大学）	宇野心平	渡辺克二	藤沢治樹
	（県立都留高等学校）	小俣　聡	矢ケ崎真二	蔦木秀一
		横瀬裕二	小俣由紀	

なお、次の諸氏からは、休日の作業参加など種々の協力を得ることができた。

（大月市土地開発公社）　溝口　進

（大月市教委）　坂本義文　村上明人　雨宮秀治　後藤一彦

6. 遺物整理および報告書作成作業は、大月市埋蔵文化財整理室において、平成元年11月13日から平成２年２月20日まで行なった。
7. 遺物の実測・写真撮影・本文の執筆および編集は調査担当者である杉本が行なった。
8. 本報告書に係る出土品および図面、写真は大月市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸氏、諸機関より多大なる御教示、御協力を得ることができた。記して感謝する次第である。

（敬称略・順不同）

田代　孝　坂本美夫　八巻与志夫　重住　豊　井上　豊
藤本高義
大月市土地開発公社　山梨県教育庁文化課　山梨県埋蔵文化財センター
猿橋伊良原郵便局

目　次

序

例　言

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　遺　跡 …… 2

第１節　遺跡の概要 …… 2

1. 遺跡の位置と地理的環境 …… 2

2. 周辺の遺跡 …… 3

3. 遺跡の層位 …… 3

4. 周辺の地形 …… 4

第２節　発掘調査 …… 5

1. 調査区 …… 5

2. 発掘調査の経過と調査方法 …… 6

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 7

第１節　遺　構 …… 7

第２節　遺　物 …… 11

第Ⅳ章　近久保経塚調査の成果と課題 …… 16

第Ⅴ章　ま と め …… 19

引用参考文献 …… 20

挿　図　目　次

第１図　近久保経塚の位置と周辺の遺跡

第２図　層位

第３図　塚付近の地形

第４図　調査区域図

第５図　調査前礫分布状況

第６図　塚実測図

第７図　遺物分布図

第８図　完掘平面図

第９図　遺物実測図（１）

第10図　遺物実測図（２）

第11図　遺物実測図（３）

第12図　近久保経塚築造から現在に至る経過模式図

図　版　目　次

図版１　近久保経塚遠景

調査前近久保経塚全景（西側から）

図版２　近久保経塚全景（西側から）

近久保経塚全景（南側から）

図版３　近久保経塚断面（南側から）

塚頂部土坑確認状態

図版４　塚頂部土坑断面

塚頂部土坑完掘状態

図版５　一石経

図版６　その他の遺物

第Ⅰ章　調査に至る経過

大月市土地開発公社（以下「開発公社」という）は、大月市が計画した、「市営住宅藤崎団地建設事業」用地取得および造成工事の要請を請け、「住宅に困窮する低所得者層に低廉な家賃で賃借する住宅建設に対処すると同時に、市域の活性化を図り、市民生活の安定と社会福祉の増進に寄与する」という目的で、公営住宅建設のための造成工事を実施することとなった。このため開発公社は、大月市教育委員会（以下「市教委」という）に対して、同団地建設予定地内の埋蔵文化財の分布状況の照会を求めた。

市教委は現地踏査を実施し、予定地内である猿橋町藤崎字近久保633番地に高さ約２ｍ、直径７～８ｍ程の塚が存在し、この場所が、「字が書いてある石」が拾える所として、古くから付近の住民に知られていたことを確認した。また、予定地内にはこの塚以外の埋蔵文化財は存在しないであろうことも併せて確認し、その旨を回答した。

これをうけた開発公社は昭和63年９月30日、文化財保護法第57条の３第１項の規定による通知を行なった。翌10月24日付で山梨県教育委員会から「発掘調査を行なう」旨の通知を受け、市教委に発掘調査を委託した。

調査を受託した市教委は、開発公社と協議を重ね、発掘調査の準備にかかった。

発掘調査は、平成元年２月13日から約一箇月をかけて実施することになり、塚の名称は地区の字名から、当初「近久保塚」と呼んでいた。

なお、名称については調査終了後「近久保経塚」と呼称することにした。

第Ⅱ章　遺　跡

第１節　遺跡の概要

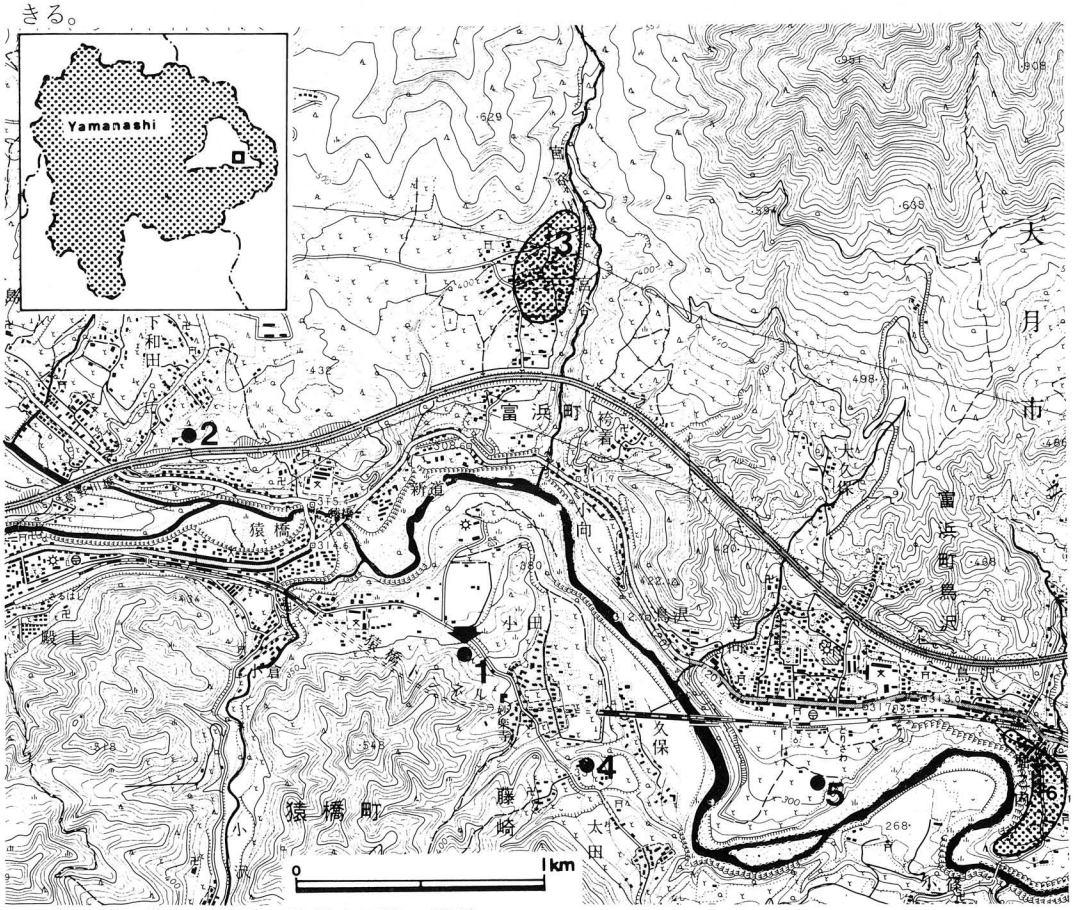
1.　遺跡の位置と地理的環境

山梨県の東部に位置する大月市は、南側を底辺とする二等辺三角形に似た形状を呈しており、その底辺にあたる南辺に沿って笹子川が東流している。笹子川はやがて南辺中央部の大月付近で桂川に合流し、さらに東に流路をとり、浅利川、葛野川、鶴川などの水を集めて相模川となる。

近久保経塚は、桂川右岸の大桑山から北方に延びる尾根上（標高約 360 m）に位置し、山梨県大月市猿橋町藤崎字近久保に所在する。

現在、尾根は県道梁川・猿橋線によって分断されており、県道より北東側の部分は「四季の丘団地」として開発され、消滅している（第１図は開発前の地形を示す）。

塚の頂部からは、西・北・東の三方を見渡すことができ、岩殿山、百蔵山、扇山などが一望できる。



第１図　近久保経塚の位置と周辺の遺跡

2. 周辺の遺跡

大月市の市域のほとんどは山林で、平坦地は極めて少ない。市内を流れる桂川・笹子川・真木川・浅利川・葛野川などをはじめ、数多くの支流によって浸食された流域には、非常に起伏に富んだ複雑な地形が形成されている。

市域には多数の遺跡が存在し、特にこれらの河川の流域には濃密である。このことは、これらの河川の流域に発達した「河岸段丘」といわれる平坦面や、起伏に富んだ地形が、縄文時代以来多くの人々の生活の場として適していたことをものがたっている。

市内の全ての河川の水を集めて流れる桂川は、名勝として知られる「猿橋」を過ぎたあたりから大きく蛇行を繰り返し、両側に多くの舌状の段丘面を形成している。近久保経塚（１）の位置する藤崎地区は、北側に突出した中位の段丘で、尾根（造成により消滅）の下部の地質が堅緻であったため浸食をまぬがれた部分である。

近久保経塚の周辺には、次のような遺跡が存在することがわかっている（第１図）。

1　**近久保経塚**

2　**お弥かげ遺跡**　縄文時代・草創期の遺物散布地、「甲斐考古」４号に山本寿々雄氏が紹介。

3　**宮谷遺跡**　縄文時代・中期の集落跡、1947年に大月市教育委員会が発掘調査を実施する他、それ以前にも小規模の調査が行なわれ紹介されている。市内では「大月遺跡」「原平遺跡」などとともに最大級の遺跡。

4　**藤崎岡遺跡**　縄文時代・中期の遺物散布地。

5　**金山古墳**　古墳が存在したとされるが現在は消滅してしまっている。周辺には集落の存在が予想される。

6　**堀之内遺跡**　縄文時代・中期～晩期の遺物散布地。大集落遺跡であると考えられる。

3. 遺跡の層位

近久保経塚の層位は、以下のとおりである。

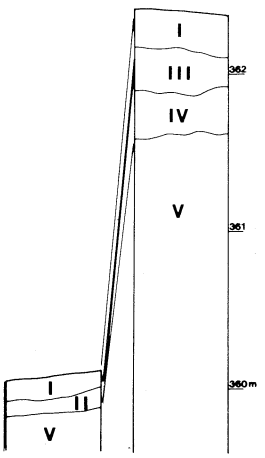
第Ⅰ層　表土黒色土。ボソボソで締まりがなく、落葉等が堆積して生成された腐食土壌と考えられる。

第Ⅱ層　黒褐色土。第Ⅰ層と第Ⅲ層の混合層で、塚の頂部の土層が崩れ落ちたものと考えられる。締まりがなく、塚の裾部およびその周辺にのみ観られる。

第Ⅲ層　暗褐色土。やや粘性があり、締まりもある。

第Ⅳ層　赤褐色ローム。基本的には第Ⅴ層と同様であるが、火山起源の堆積物を多量に含むと考えられ、色調が赤味を帯びている。

第Ⅴ層　黄褐色ローム。風化した凝灰岩や砂岩を多量に含む、不均質なローム層。



第２図　層位

4. 周辺の地形

先述のとおり、近久保経塚は桂川右岸の大桑山から北方に延びる尾根上に位置している。塚のある場所は、尾根の傾斜がやや緩く、また最も尾根が幅を狭めた部分である。現在この尾根は、塚の30mほど先（北東）で、県道梁川・猿橋線によって分断されているが、現県道が通る以前は恋路峠という峠道になっていて、塚はその道添いにあったことになる。

県道以北の尾根部は、四季の丘団地の造成工事によってほとんど消滅しており、現在では最先端部だけが御伊勢山自然公園として残っている。

尾根の両側は斜面になっており、北西側の斜面の方が南東側よりも傾斜がきつく、起伏に富んでいる。

第3図　塚付近の地形

第２節　発掘調査

1. 調査区

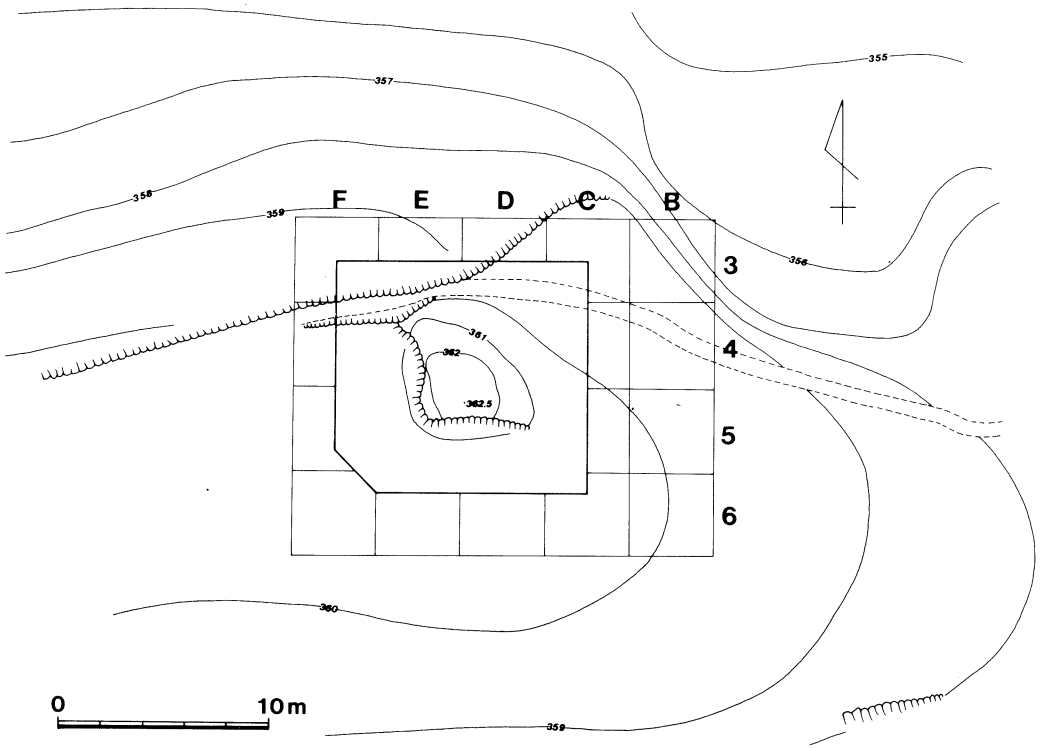
発掘調査を開始するにあたって、第４図に示すような調査区域を設定した。

塚の西側と南側は人為的に削り取られており（耕作地拡張のための後世の撹乱）、塚の中央部が明確ではなかった。そこで現存部分の中での最頂部にポイントをとり、このポイントを中心に磁北に合わせて、グリッドを設定した。

各グリッドは４ｍ四方で、東西方向にアルファベット、南北方向にアラビア数字を付し、これを組合せてＣ－３グリッドというように呼称することとした。

調査範囲はとりあえず塚の裾部よりも約２ｍ外側までとし、調査の進展によって、なお外部に付属施設が認められるようであれば拡張することとした。したがって、塚の最頂部をＤ・Ｅ列、４・５列の交点とし、拡張調査の必要が生じても対応できるよう、周囲に余裕のあるグリッドを設定することとした。

なお、Ｆ－５・６グリッド部の調査区コーナーが斜めに設定されているのは、この部分に太い樹木が立っていたためである。



第４図　調査区域図

2. 発掘調査の経過と調査方法

現場作業の準備は平成元年２月７日に開始した。以下、発掘調査の手順と方法を経過を追って記述する。

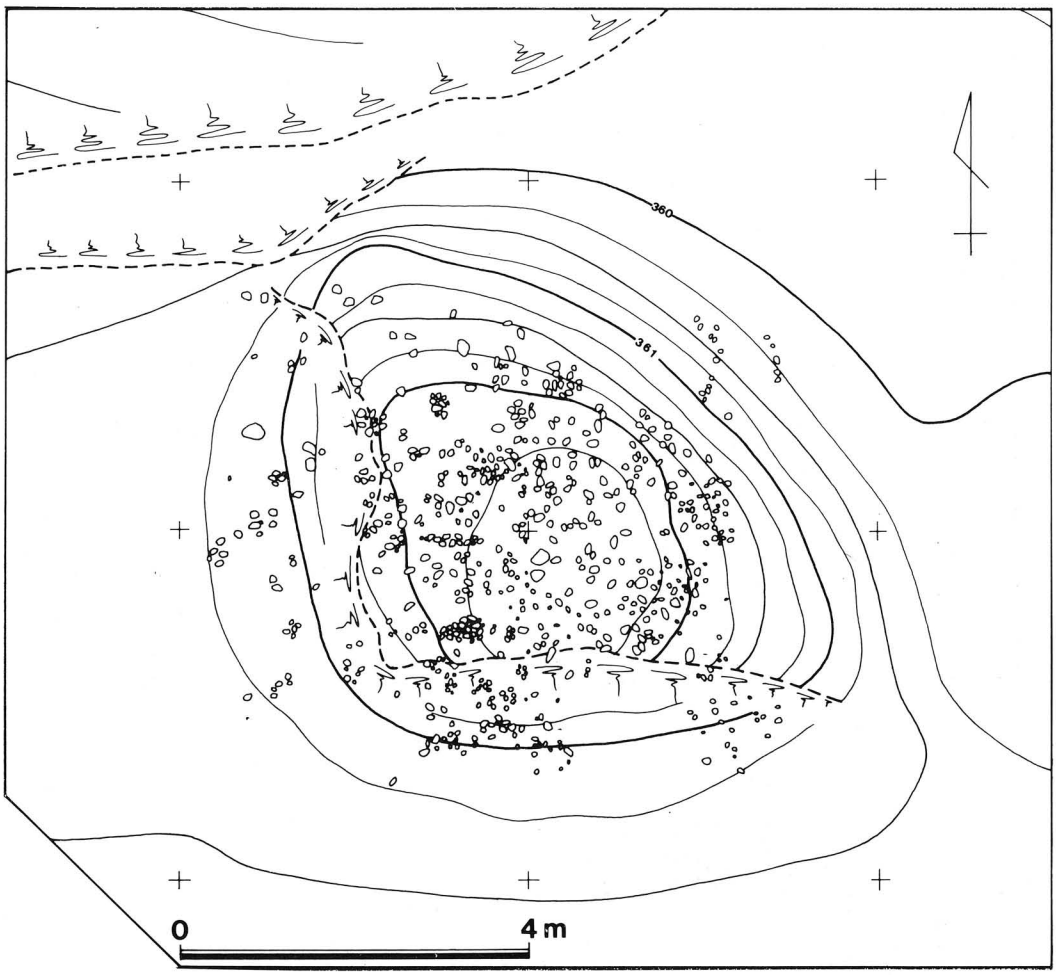
２月７・８日　◎遠景写真の撮影（百蔵山麓・扇山山麓から）。
10～12日　◎塚および周囲の樹木の伐採（森林組合に依頼）。
12日　◎発掘調査器材の搬入。
13日　◎発掘調査開始。現況写真の撮影のため塚周囲の清掃。コンテナハウスの搬入。
14日　◎現況写真の撮影。ベンチマーク設置。グリッド設定（測量と杭打ち）。
15日　◎グリッド設定。遺構周辺のコンタマップ作成。
16日　◎コンタマップ作成
17～19日　◎雨のため作業休み。
20・21日　◎塚頂部の礫分布図作成。
22日　◎塚の調査。まず、人為的掘削のないＣ・Ｄ－３・４、グリッドを調査し（この部分が最もプライマリーな土層堆積をしていると考えられる）、土層堆積状態の観察を行なった上で、他のグリッドの調査方法を決定する事にした。出土遺物は原則的には全て番号を付し出土位置を記録してから取り上げる。表面に散布している遺物や、流れ落ちて埋没している遺物は、グリッドごとに一括して取り上げることにした。
３月８日
９日　◎Ｅ・Ｆ－３・４グリッドの調査。Ｄ－４グリッドの調査の結果、塚は削りだして構築されていることが分かったので、以後地山より下部は掘らないこととして調査を進めた。
◎Ｅ－４グリッドに落込みを確認。
15日
16日　◎Ｃ・Ｄ－５・６グリッドを調査。
24日
25日　◎Ｅ・Ｆ－５・６グリッドを調査。
◎Ｅ－４グリッドに検出した落込み（土坑）の全容を確認。
28日
29日　◎土坑の調査。
30日　◎完掘平面図作成。
31日　◎発掘調査器材の搬出。

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　　遺　　構

塚がある尾根は、本来北東方向に延びていたが、塚の東側約30ｍの部分で県道梁川・猿橋線により寸断され、それ以東は四季の丘団地の造成により消滅している。したがって、現在では塚は尾根の末端に位置していることになる。

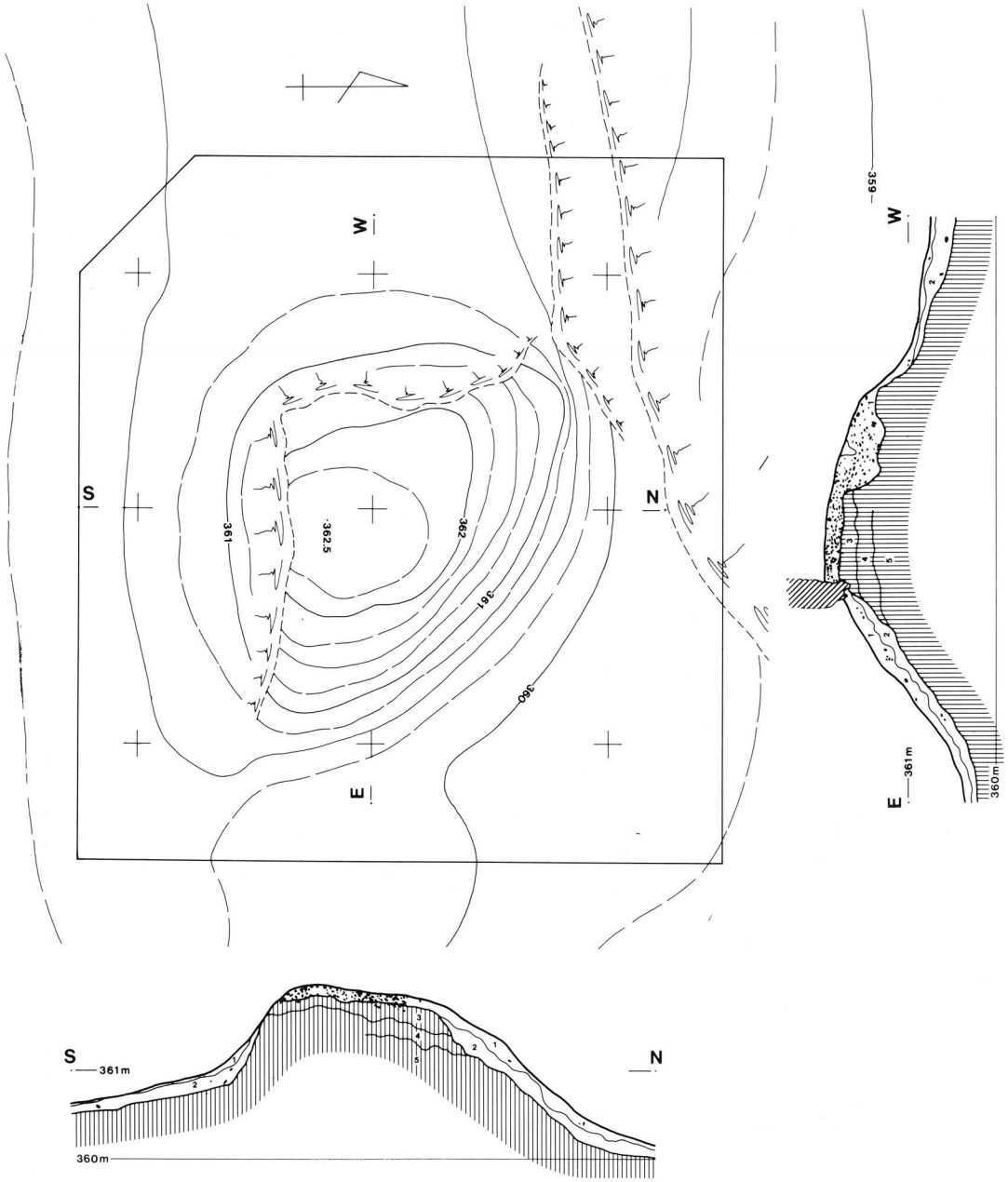
尾根の幅は約100ｍ程で、近久保経塚はそのほぼ中央の標高約360ｍほどの馬の背状の部分にある。



第５図　調査前礫分布状況

塚は直径約８ｍ、高さ約２ｍで円形のマウンド状を呈しており、頂部のやや平坦な部分には、非常に多数の礫が集積していた。礫の大きさは、大きいものでも挙大以下で、河原から運ばれたと考えられる円礫である。

塚の東側と南側は人為的に削りとられており、急傾斜になっている。裾部には頂部から崩れ落ちた多数の礫が集積していた。



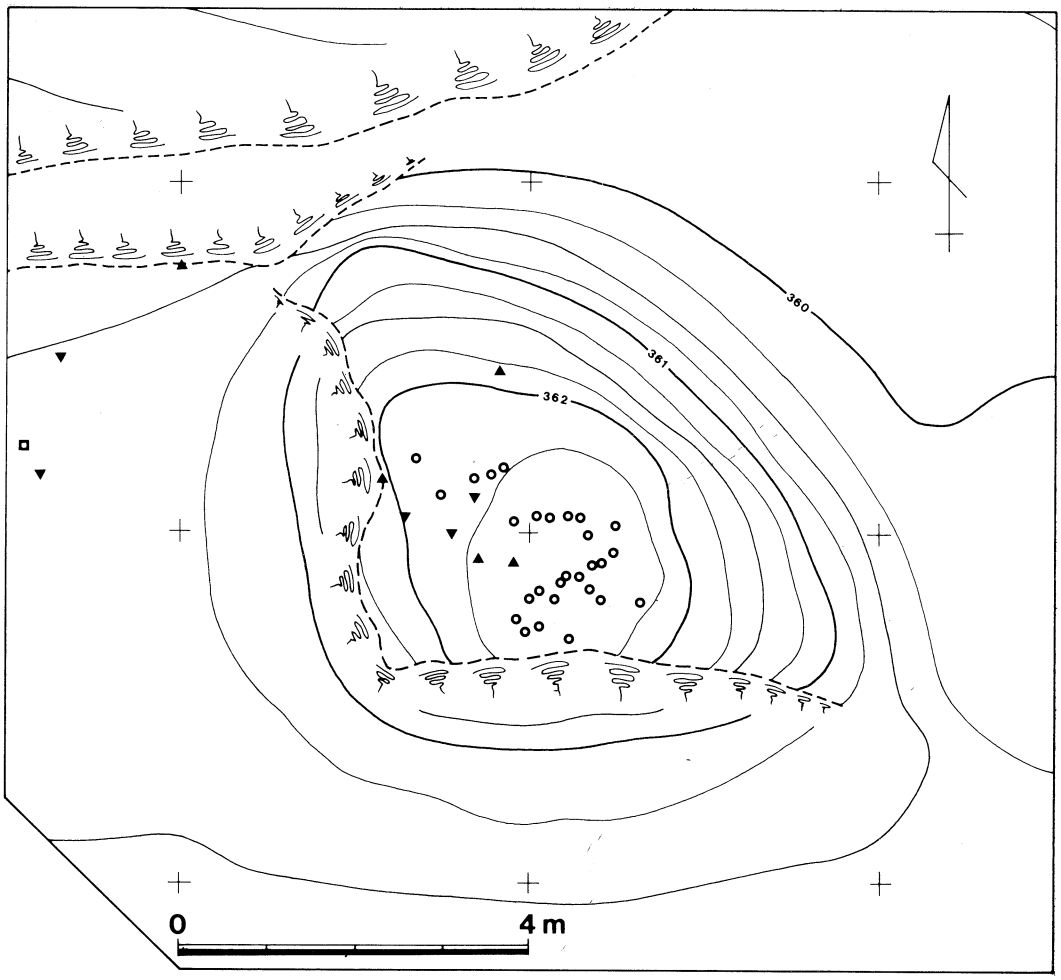
第６図　塚実測図

塚を構成する土層は、第Ⅱ章に述べたような内容であるが、これらの所見からこの塚は土を盛り上げて築造したものではなく、塚の形を掘り残して周囲の土を削りとって作り出したものであることがわかった。

頂部を覆う多量の礫は塚築造後に運ばれたもので、非常に密に敷きつめられている。これらの礫のなかに、希に墨書された礫が含まれており、一つの礫には一文字が書かれている。

これは通常「一字一石経」と呼ばれるもので、今回の調査では44点が検出された。

そのうち出土地点が明確なものは28点で、第７図に示すように、すべて塚の頂部から出土している。



○ 一石経
▼ 陶　器
▲ 磁　器
□ 鉄　器

第７図　遺物分布図

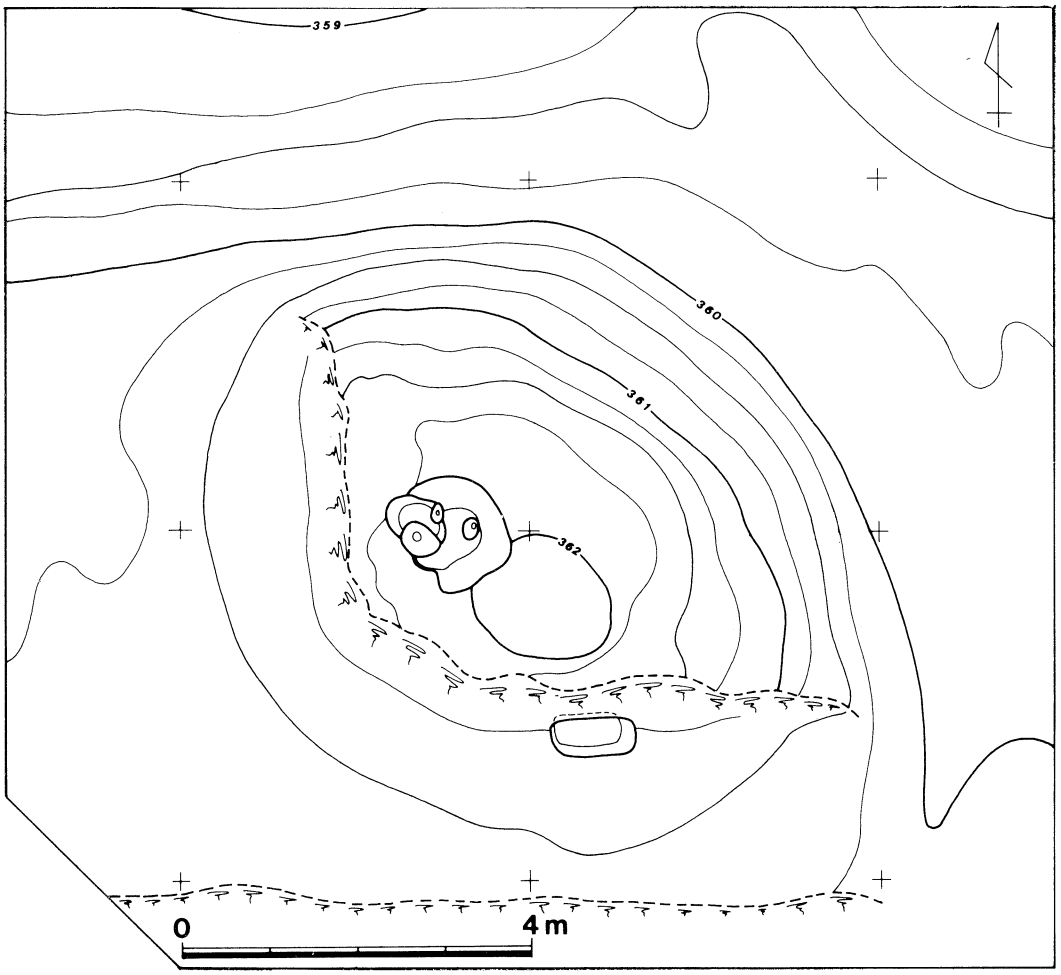
塚頂部のやや西側には、直径約150cm、深さ30cm程の土坑が確認された。

この土坑が機能的に塚に伴うものであるかどうか、明確にできる資料は見いだせなかった。

わずかながら、第6図の断面E—Wを見ると土坑が埋まった後に礫が敷きつめられたような傾向が見られ、塚築造と同時、あるいはそれ以前に土坑が埋まっていたことを示唆するものかもしれない。

土坑内からは礫以外の出土遺物はなく、それらの礫の中には一石経は含まれてなかった。土坑の底部は凹凸があり複雑な形態をしているが、これは樹木の根による撹乱痕である。

塚の東側と南側の削られた部分は、耕作地の拡張の結果である。つまり、塚築造後、周辺の耕作地の拡張が行なわれ、塚の一部を削り取るに至ったのである。ただし、地元の古老の話しによると、南側部分には以前マツが生えており、昭和初期頃の台風によって倒れてしまったという。したがって、南側部分を削り取ったのはそのマツの後始末に端を発していると考えられる。



第8図　完掘平面図

第２節　遺　物

調査区域内からは、礫、一石経、陶器片、磁器片、鉄器、石器が出土した。

礫はすべて河原に見られるような円礫で、総数は10,000点以上におよぶ。大きさは最大のもので挙大ほど、小さなものは１cmほどであった。

一石経といわれる文字の書かれた礫は出土位置不明のものもあわせて44点が出土した。通常の礫は青みを帯びた黒い色調であるが、本塚で一石経に使用されている礫は、例外なく赤褐色を帯びているという特徴がある。

ちなみに、このような特徴は調査の初期段階に認識されていたので、他の礫との識別は比較的容易であった。また墨が消えかかっていて、通常では見逃してしまいそうなものでも、この特徴のため見落とさずに収拾することができた。

以下、実測できた一石経の諸データについて一覧表に示す。

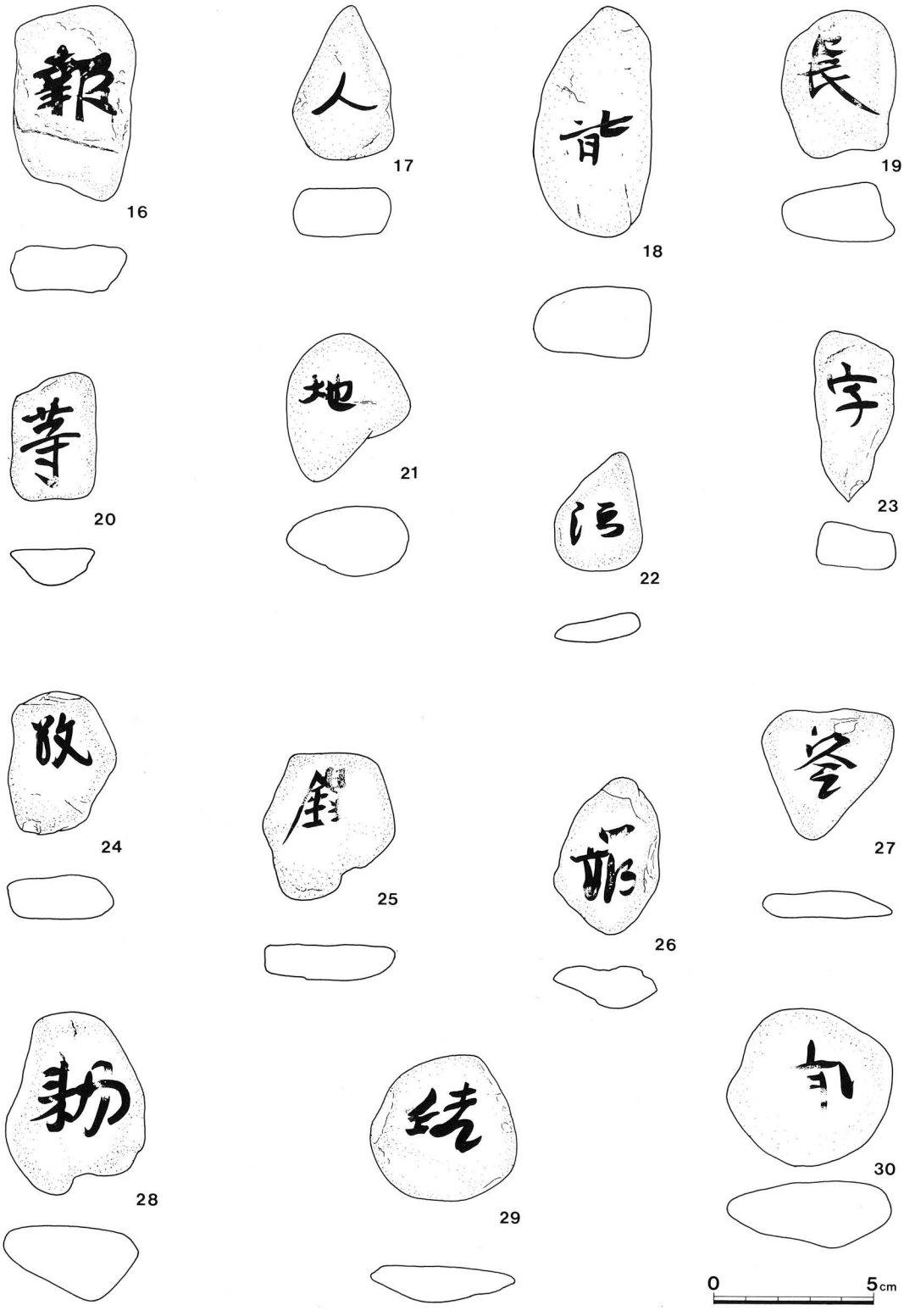
単位（cm、g）

番号	長さ	幅	厚さ	重量	文　字
1	5.9	6.3	1.7	74.0	梵字「ゑ」と「親」
2	6.8	4.6	2.5	89.4	「敬」
3	5.1	4.3	2.7	74.9	「天」
4	5.5	5.2	1.5	56.4	「見」
5	4.6	1.5	1.3	15.5	「見」
6	4.2	3.9	2.1	51.0	「百」
7	3.2	3.3	1.3	15.3	「百」
8	3.7	3.0	1.3	22.8	「寶」
9	6.7	3.8	2.8	79.2	「大」
10	4.3	3.1	1.4	28.9	「浮」
11	4.5	3.3	1.0	19.9	「若」か？
12	4.6	2.8	1.9	29.8	「主」
13	4.6	4.2	1.7	48.5	「中」
14	6.5	4.0	1.8	64.0	「花」
15	3.5	3.5	1.8	33.1	「順」

番号	長さ	幅	厚さ	重量	文　字
16	6.0	3.8	1.4	51.1	「報」
17	4.8	3.2	1.6	34.7	「人」
18	7.2	3.7	2.7	98.1	
19	4.7	3.5	1.9	43.6	「長」
20	3.9	2.6	1.1	17.4	「等」
21	4.6	3.9	2.2	49.0	「地」
22	3.8	2.6	1.0	12.2	
23	5.3	2.6	1.4	27.5	「字」
24	4.4	3.2	1.5	29.9	「散」か？
25	4.6	4.1	1.2	31.9	「錫」か「鍠」か？
26	4.9	3.3	1.3	25.4	
27	4.0	4.0	0.8	16.9	「盗」か？
28	5.9	4.3	2.2	62.1	「耕」か？
29	4.8	4.5	1.2	29.9	「結」か？
30	4.8	5.1	2.0	64.4	「宜」か「寔」か？

表－１　出土一石経計測値一覧表

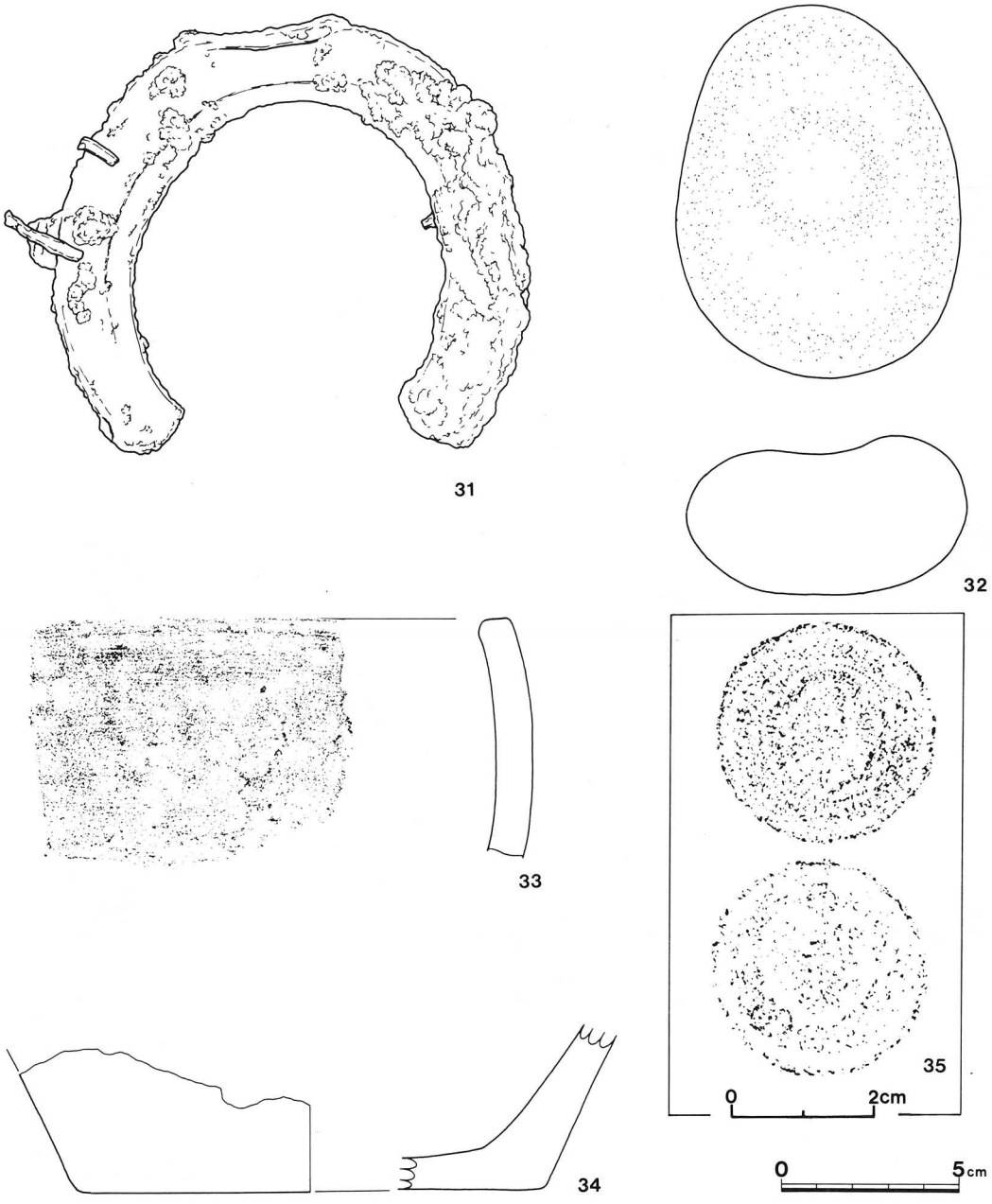
第9図　遺物実測図（1）



第10図　遺物実測図（２）

他の14点の一石経は、墨が擦れていて、文字は読み取れなかった。

計測の結果をみると、長さは最大7.2㎝・最小3.5㎝、幅は最大6.3㎝・最小1.5㎝、厚さは最大2.8㎝・最小1.0㎝、重さは最大98．1ｇ・最小12．2ｇで、出土したすべての一石経はこの数値の範囲内ということになる。大きさ（形）、重さともにばらつきがあり、使用する礫の大きさについては特に標準はないようである。



第11図　遺物実測図（３）

一石経以外の遺物としては、陶器や磁器の破片が多数出土したが、ほとんどが表土の腐食土中からの出土で、完形品あるいは接合して完形になったものはなかった。

しかし釉薬や胎土、描かれた図柄などをもとに固体別に選別してみると、その数は80固体以上もあり、また時期的にも江戸期から昭和にかけての幅広い期間のものがある。

固体数の多さから考えると、塚に散乱していた陶磁器類は、わざわざ運ばれてきて放置されたものではなく、供献用に使用された容器であるとも思える。

鉄器は、蹄鉄1点（第11図—31）と鎌の刃部1点が出土したが、ともに著しく酸化しており、錆が厚く付着していた。塚の裾部からやや離れた場所からの出土であり、塚の機能に伴う遺物であるかどうかは不明である。

第11図—32は、多量の礫に混じって出土した唯一の石器で、縄文時代の磨石である。多孔質の安山岩製で、片面中央部がやや窪んでいる。他の礫は川原から運搬されたと考えられるが、この磨石はそれらの礫とは別の場所から運ばれたものであろう。

塚に最も近い縄文時代遺跡としては、南東約500ｍほどに藤崎岡遺跡（第1図—4）が確認されており、あるいはここから運ばれたものかもしれない。おそらく畑の耕作などによって偶然に出土したもので、形がきれいで珍しいことから意識され、塚に運ばれたのではないだろうか。

35は貨幣で、やはり第1層の表土中からの出土である。

緑青が付着していることから銅貨であることが分かる。酸化が進み、ほとんど図柄が読み取れないが、明治9年発行の二銭銅貨ではないかと考えられる。

貨幣の出土はこの1点だけで、塚との関連は明確にできない。

第Ⅳ章　近久保経塚調査の成果と課題

1　塚の築造方法について

塚の築造方法については第Ⅲ章で多少ふれたが、ここでは調査の成果として、やや詳しく説明したい。

＜土層堆積状態の観察から＞

第Ⅰ層は塚および塚の周辺に普遍的に堆積している土層で、ほそぼその腐食土である。塚築造後に植物の腐敗によって生成された土層である。

第Ⅱ層も塚の築造後に生成された土層で、主に塚の頂部付近の土層が崩れ落ちたものである。第Ⅲ・Ⅳ層を主体とした、第Ⅰ層との混合層である。

第Ⅲ層は、通常ロームの上位に堆積している暗褐色土と同様の土層と考えられ、この層以下には礫の集積が認められないことからも、塚築造時の表面部（最上部）であったと考えられる。

第Ⅳ層は赤味を帯びた色調の火山起源の土層で、尾根の傾斜に沿って、やや北西方向に低く傾いているが、ほぼ水平に堆積している。

第Ⅴ層は山腹の風化礫とロームとの混合層で、山麓の安定部には普遍的に存在する。

これらの土層のうち、第Ⅲ層以下は塚築造以前に堆積していたプライマリーな土層で、人為的な移動等は認められない。

以上の土層堆積状態の観察から、塚築造以前から現在に至るまでの経過を模式化すると第13図の様になるであろう。

1段階　塚築造前の尾根は標高362ｍ余の非常に痩せた尾根であったと思われる。

2段階　塚部分を掘り残し、周囲の土を除去。掘りだした土は塚の南側の谷部（現耕作地）へ排土したのではないだろうか。

3段階　頂部に礫が集積され、経塚が完成する。

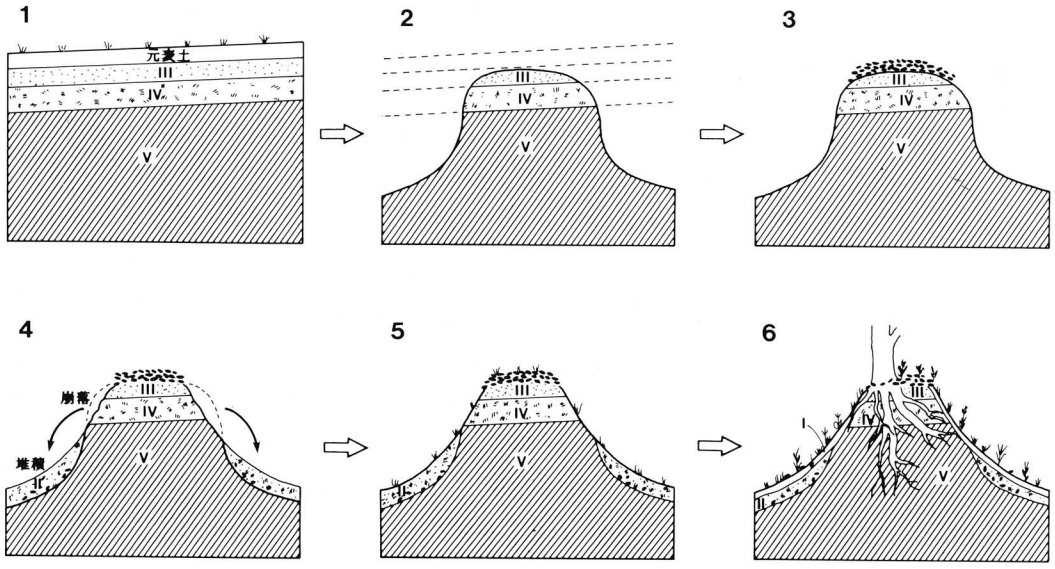
4段階　時間の経過とともに降雨や霜によって頂部付近の土や礫が崩落し、裾部へ堆積する。

5段階　樹木や草本が繁茂する。

6段階　現表土である第Ⅰ層が生成される。

以上のような段階を経て現在に至っているものと推測される。なお、このような経過の中で、2段階から3段階にかけては一貫した塚築造の期間であると考えられ、時間的にはごく短期間であろう。また4段階から6段階にかけては、かなり長期の時間経過を経ていると思われる。

塚頂部には根元の周囲が250㎝ほどの樹木が生えていたが、地主の藤本氏によると、この木は昭和20年代にはまだ苗だったもので、実際に調べてみると、37ほどの年輪が確認できた。塚の標識として樹木を植えたとみられる発見例が各地にあるが、この木はそれにはあたらない。だが、以前生えていたというマツが標識としての樹木であった可能性はある。



第12図　近久保経塚築造から現在に至る経過模式図

塚の形態や築造方法については各地で種々の例が確認されており、定形的なものはないようである。しかし、今後調査例が蓄積されれば、時代的、地域的、あるいは目的的な違いによって形態や築造法などの類型化を図ることができるかもしれない。

2　礫の選定について

第Ⅲ章の第2節で、本塚の一石経に使用される礫の特徴として、色調が赤褐色を帯びていることを述べた。

単に文字を書くだけならば他に形のよい扁平な礫は多数あるが、通常の礫に文字が書かれている例はなく、文字を書くための石は、たとえ形が悪くても赤褐色のものを意図的に選んでいる。これは、礫の色が赤褐色であることに何らかの意味があったためと言えよう。

肉眼による所見ではこれらの礫の色は、火に焼かれて赤色化したようでもあり、鉄分が染み込んで酸化したようでもあるが、明確なことは化学的な分析を試みなければ分からない。前者であれば人為的に赤色化していることになり、後者とすればすでに赤色化しているものを採集して利用したことになろう。

前者の場合、文字が書きやすく扁平で均一な礫を選ぶことができるが、実際の一石経は形も大きさも様々で、可能性としては、すでに赤色化している礫を見つけて利用したとする方が考えやすい。ちなみにこのような礫は、山肌の崩壊部分などで見かけることがある。

東京都三宅村の物見処遺跡1号積石遺構から検出された一石経の表面には、赤色顔料が塗布されているということであり、赤い色にこだわっている点で共通性があるように思える。

3　築造年代について

塚の築造については、地元に種々の言伝えがあって、「鎌倉時代頃に負傷した武士が逃げてきて、この地で息絶えたので塚を造って葬った。」とか、岩殿山の黄金伝説に関連し、“朝日射し夕日輝くその木の下に黄金千枚二千枚”の歌の比定地であるというもので、これなどは以前塚の頂部にマツが生えていたことに起因している。

これらの言伝えと結びつけるには、一般的な一石経の経塚の発生時期などから考えて、時期的に合致せず、言伝えは塚築造の直接の要因とはならないであろう。

調査の結果、塚からは築造年代を決定できる遺物の出土はまったくなく、また言伝えを裏付けるようなものも検出されなかった。

安政六（1859）年の藤崎村絵図にも、該当する場所には何も記されてはいない。

したがって、時期決定について積極的な根拠は一切ないが、一石経の経塚が江戸時代に盛行したものであることから、本塚も江戸時代の築造であると推定される。

4　その他

一石経の経塚には、経文を一石に一字づつ墨書し埋納した例が多く、7万点以上の一石経が出土した例もある。もちろん書写した経典によって、その数に違いがあることは当然ではあるが、近久保経塚で出土した44点という出土数は、非常に少ないといえよう。これはマツが倒れたときに根とともに崩れた土塊の中に含まれたり、大正から昭和初期にかけて子供達が拾い集めたという地元の人の話もあり、かなりの数が塚から無くなっているためと考えられる。

一石経の筆跡をみると複数の人の手によって書かれたようである。今回数少ない一石経の中にも、同一文字が書かれたものが2例あり（第9図－4・5、6・7）、明らかに手筆が違うことが分かる。塚の築造にしても、かなり大量の土を移動しているはずで、塚の築造から写経、埋納にかけて複数の人が関わっていると考えられる。

判読できた文字は少なく、書写した経典を判明することはできなかった。出土一石経中、特異なのは一石に2文字が書かれた第9図－1である。一石に複数の文字が記される場合、「多字一石経」などと呼称され、けっして珍しいものではないが、梵字が併記される例は少ないという。第9図－1は「親」の上に梵字「𑖀（カ）」が記されている。「𑖀」の種子は地蔵菩薩であり、短絡的ではあるが、地蔵信仰との関連も考えられる。

以上、近久保経塚調査の成果として思いつくままに記述してみたが、いずれも可能性を指摘しただけで、明確にできたことは少ない。成果として取り上げたこれらの項目はそのまま残された問題点として、今後検討されなければならないであろう。

第V章　ま　と　め

わが国における経塚の築造は、弥勒思想にもとづく56億７千万年の後まで仏教教典を残そうとする意思から10世紀の末頃から始められ、埋経というかたちで行なわれていたものであるが、中世には納経の経塚、近世になっては一石経の経塚へと変化しながら継続されてきた。

近久保経塚の築造時期については明確な比定はできないが、江戸時代の築造であることはほぼ間違いないであろう。

一石経の書写供養の願意については、各地の経碑を伴う発見例から、追善供養、豊作祈願、病魔退散祈願、雨乞など様々な目的があることが分かっているが、本例の場合経碑などを伴わず、いかなる目的で築造されたものか知ることができない。微弱ながら、塚の表面や周囲に散乱していた多数の陶器片や磁器片が「供え物をした痕跡」と考えられるならば、病魔退散祈願や雨乞などのような一回限りの目的ではなく、継続性を伴う目的であった可能性もあると言えよう。

近隣では『上野原町誌』に大目の太田経塚の石経信仰として紹介されており、縁日には供え物をして家内安全や身体健全を祈願したようである。このような事例が近くにあることからも、本塚も経塚そのものが信仰の対象となっていたことも考えられる。

一石経の塚は大月市では初めて意識され初めて調査されたわけであるが、意外にも近久保経塚のすぐ近くに類例があったようである。地元の人の話では、その塚は近久保経塚と同じ尾根上にあり、やはり字の書いてある石が拾えたそうである。残念ながら「四季の丘団地」造成時に消滅したということで、今となっては何も知ることができない。

しかし、同じ集落内に複数の経塚が存在していたということは、この経塚の築造は決して特殊なことではなく、当時、かなり一般的に行なわれていた行為であると理解できる。したがって、綿密な分布調査が実施されれば、藤崎地区以外にもこのような一石経の経塚の存在を確認できるのではないだろうか。

近世の民衆信仰の一形態を探る資料として貴重なものであり、今後注目して行く必要がある。

引用参考文献

1968　山　本　寿々雄　『山梨県の考古学』　吉川弘文館

1975　『上野原町誌』　上野原町教育委員会

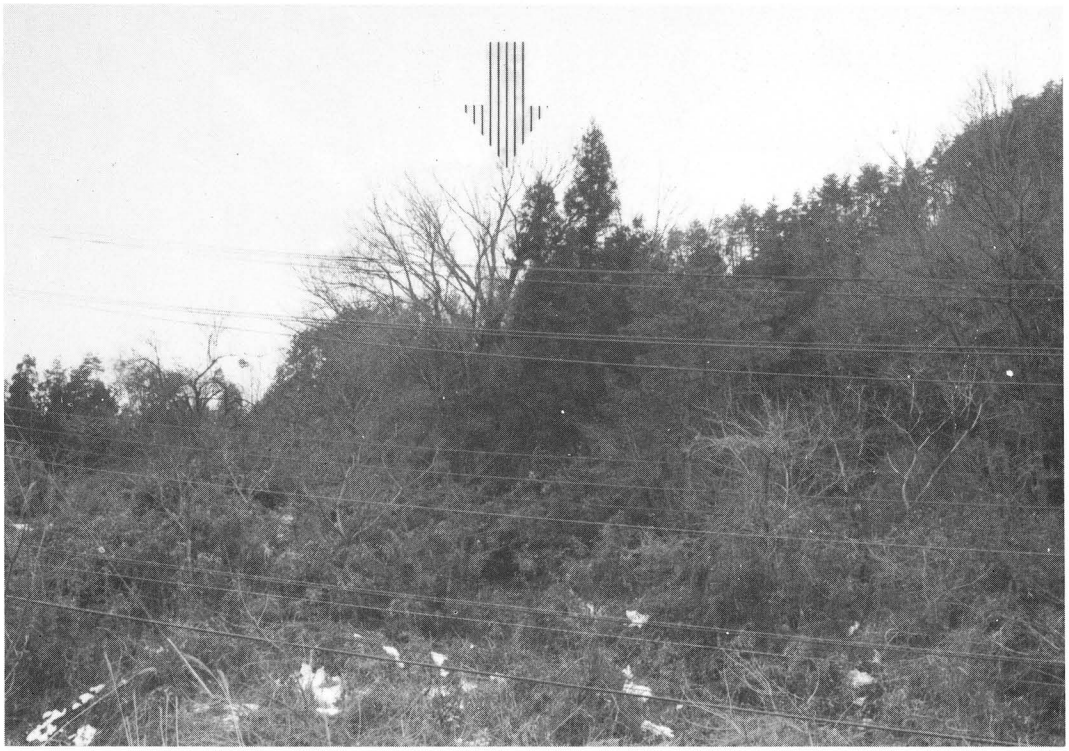
1987　田　代　　孝　「山梨の経塚」『山梨県考古学協会誌』1

1989　田　代　　孝　「近世の経塚について」『考古学雑誌』74－4

1989　田　代　　孝　「山梨の近世経塚」『甲斐の成立と地方的展開』　角川書店

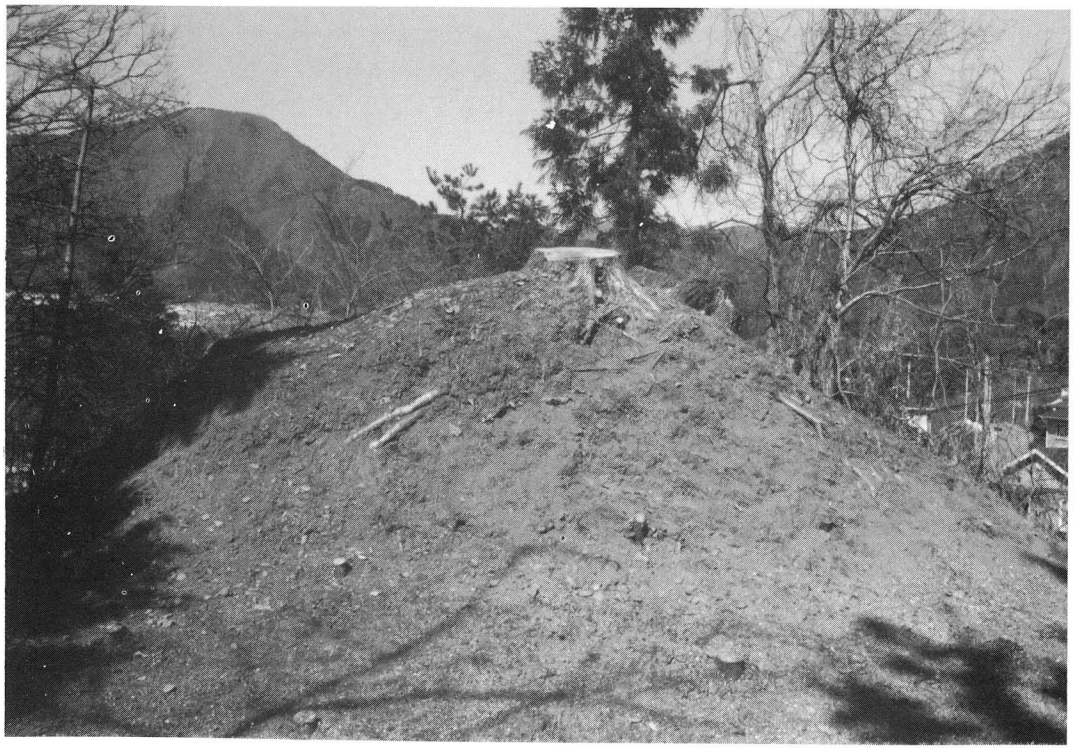
1990　関　　秀　夫　『経塚の諸相とその展開』　雄山閣出版

写　真　図　版



近久保経塚遠景

調査前近久保経塚全景（西側から）



近久保経塚全景（西側から）

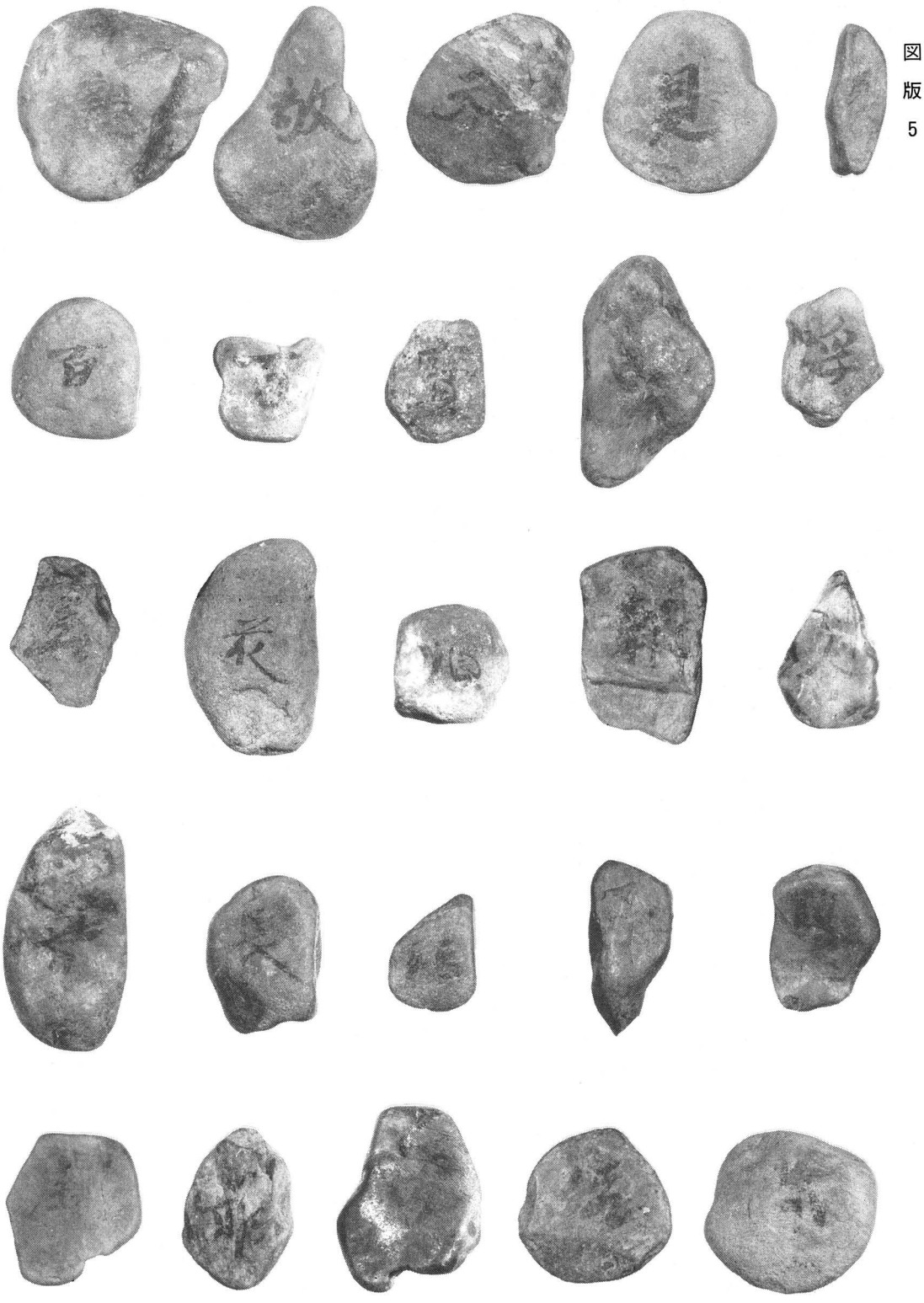
近久保経塚全景（南側から）

近久保経塚断面（南側から）

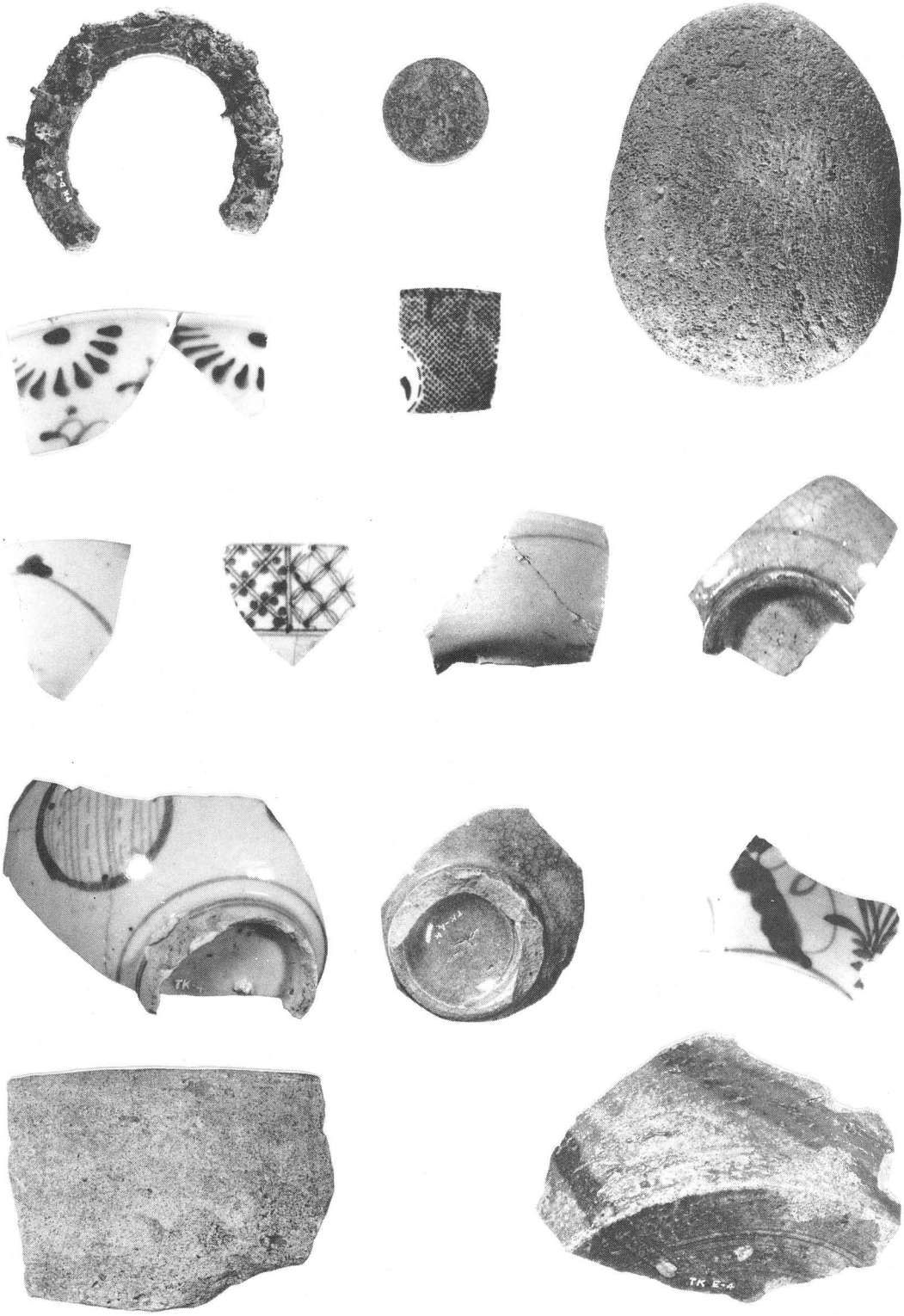
塚頂部土坑確認状態

塚頂部土坑断面

塚頂部土坑完掘状態



一石経



その他の遺物

山梨県大月市

近 久 保 経 塚

平成２年５月31日　発行

編集・発行　大月市教育委員会

〒401　山梨県大月市大月二丁目６－20

☎0554-22-2111（内）522

印　刷　㈱ 大月プリント社

〒401　山梨県大月市大月二丁目17－５